

中島敦の世界  
山月記と名人伝

目次

中島敦の「山月記」

- 一、 第一章（隴西ろうせいの李徴りちようは…）
- 二、 第二章（翌年かんざつぎよし、監察御史…）
- 三、 第三章（今から一年程前…）
- 四、 第四章（袁滲えんさんはじめ一行は…）
- 五、 第五章（何故なぜこんな運命に…）
- 六、 第六章（漸くあたり四辺の暗さが）
- 七、 結び

※ 参考文献

目次

序 中島敦の「名人伝」

一、 修行

二、 不射之射ふしや

三、 霍山かくさんの頂

四、 下山

五、 晩年

六、 結び

※ 参考文献

中島敦の「山月記」

## 中島敦の『山月記』

例えば、中島敦の『山月記』という作品は、彼の作品の中では、最も有名な「作品」（短編小説）の一つであるが、それは、戦後、学校の教科書などにも載るようになってからだそうであり、その「原典」は、中国（宋朝）の『太平広記』や『古今説海』、また、中国（清朝）の説話集『唐人説薈』の中にある『人虎伝』などを元として書かれたものであり、その「内容」を一言で敢えて言えば、それは、まさに「人間が虎に変わってしまった」という、そのような、まさに現実にはあり難い怪奇な話でありながら、それでは、この「作品」の一体どこがどのように魅力的だというのだろうか？ その問題について、本文は「漢文調」であり、やや難しいが、少しばかり考えてみたいと思う。

\*

\*

まず、中島敦という人は、一九〇九年（明治四十二年）の五月に生まれている。この年は、有名な「太宰治」が生まれた年でもある。そして、父親は、旧制銚子中学校の漢文の教師であったという。一方、中島敦は、一九三三年（昭和八年）の三月に、東京帝国大学国文学科（つまり東大）を卒業して、その年の四月に、横浜の「女学校」の国語と英語の教師になっている。その後、一九四一年（昭和十六年）にはその職を辞して、パラオ南洋庁に教科書編纂掛として療養を兼ねて赴任するが、その年の十二月八日には「太平洋戦争」（真珠湾攻撃）が勃発し、その戦火が激化するなか、翌一九四二年（昭和十七年）十二月四日に、気管支喘息で満三十三歳の若さでこの世を去ってしまうのである。ちなみに、『山月記』という作品は、一九四二年（昭和十七年）に発表され、一方、『名人伝』という作品は、中島敦の死後に発表されたものである。

### 一、第一章

それでは、その『山月記』の冒頭の「文章」であるが、それは、次のようなものである。つまり、「……隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかつた。いくばくもなく官を退いた後は、故山、號略に帰臥し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみ徒らに炯々として、曾て進士に登第した頃の豊頬の美少年の倂は、何処に求めようもない」（本文）とある。

\*

\*

それでは、その「本文」の「内容」について考えてみたいと思うが、それは、次のような内容である。つまり、「……隴西の李徴という人は、博学（知識豊富で）才穎（才能に恵まれ）、天宝の末年（最後の年）、若くして名を虎榜（科挙に合格した者の名を記した札）に（自らの名）を連ね、ついで江南尉（江南の警察官の役職）に任命されたが、性（性格）は、狷介（頑固で自分の考えに固執して）、自ら恃むところ頗る厚く（自ら信じるところを固く守り、人の意見も聞かず）、賤吏（下級役人）に甘んずるを潔しとしない

(自らの信念に照らして受け入れることができ) なかった。いくばくもなく(やがて) 官を退いた後は、故山(故郷)、號略に帰臥(帰郷して、静かに暮ら)し、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つた。下吏(下級役人)となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚らず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴は漸く焦躁(焦り)に駆られて来た。この頃からその容貌も峭刻(険しく)なり、肉落ち骨秀で(骨が出て)、眼光のみ徒らに炯々(ギラギラ)として、曾て進士に登第した頃(科挙に合格した頃)の豊類(ふつくらとした類)の美少年の倂は、何処に求めようもなかつた」とある。

さて、ここで最も大事なことの二つは、まず、「作者」(中島敦)という人は、いわば格調高い「漢文調」の表現によつて、まさに「文章の美しさ」そのものに深くこだわつた作家の一人であつたということである。次に、作品の主人公「李徴」という人は、博学才穎であり、科挙の試験にも合格して、その結果、江南尉(江南の警察官の役職)に任命されるが、彼は、生来頑固で、自ら恃むところ頗る厚く、他人(例えば上司)の言うことなどいちいち素直に聞けるような性格ではなく、それゆえ、地方の「下級役人」などに満足して、長く膝を俗悪な大官の前に屈するようなことはとてもできないということ、それよりは、むしろ「詩人」となつて、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたということである。これは、これで「一つの考え方」であり、彼自身、実際に「地方の役人」というものをわが身を以つて経験してみると、あらためて自分という人間は、とても「役人には向いていないなあ」というようなことを真にわが身に染みて「実感」したに違ひなく、だからこそ、やがて、その官を退いては、故郷(ふるさと)へと歸つて、静かに暮らし、そして、人と交を絶つて、ひたすら詩作に耽つたということになるのだろう。……

それでは、李徴という人の、一体、どこに「判断の甘さ」というものがあつたのかと敢えて問えば、その一つは、まさに「人との交を絶つた」というところであり、詩家になろうとして、ひたすら詩作に耽つたことに何の問題もなく、問題なのは、「人との交を絶つた」というところであり、何も「人との交を絶つ」必要はなかつたのである。つまり、ひたすら詩作に耽つて「人との交を絶て」ば、どうしても「孤独」になりやすく、そのような「孤独」を長く続けることは、やがては彼の「精神状態」の中にいわば「神経衰弱」状態というようなものが生じてきて、精神が不安定になりやすいのである。

そして、この「神経衰弱」という問題は、一度は徹底的に考えてみなければならぬ問題の一つであり、なぜなら、明治時代以降、われわれ日本人の「作家」たちを真に苦しめて来たもの一つに、まさに「神経衰弱」という問題があるからである。——例えば、夏目漱石の「神経衰弱」は特に有名であるが、明治以降の日本人、いや、世界中の実に数多くの「知識人」たちが、この「神経衰弱」というものに、多かれ少なかれ、深く悩み苦しんでいるのである。それでは、その「神経衰弱」とは、一体、何かと敢えて問えば、それを今日の医学界の言葉で言えば、それは、いわば「うつ病」(或いは「躁鬱病」)に近いものであり、その「うつ病」という牢獄の「囚人」に陥りやすいということである。

例えば、若い時の小林秀雄という人は、ボオドレエルの『悪の華』という作品の「球体の中」に虫のように閉じ込められていたという。それは、ボオドレエルの『悪の華』に出て来る言葉を借りれば、まさに「……地上を好んで廃墟(虚無)と化し、欠伸の中に、世界を嘔む。これぞ、倦怠。——眼に思はずも涙を湛へ、長き煙管(思索)を煙らせて、断頭



往年（昔）の秀才李徴の自尊心をどれほど深く傷つけたかは、想像に難くなく、それが、彼の「精神状態」をどんどん「うつろの脳」へと悪化させてしまい、彼は不平・不満ばかりで樂しまず、常識を欠いたおかしな言動なども、ますます抑え難く、むしろ増えるようになってしまった。そして、一年後、公用で旅に出、汝水のほとりに宿った時、彼は、夜中、遂に発狂してしまった。急に顔色を変えて寢床から起き上ると、何か訳の分らぬことを叫びつつそのまま下に飛び下りて、闇の中へ駆け出し、彼は二度と戻って来なかった。附近の山野を搜索しても、何の手掛りもなく、その後、李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった」と続くのである。そして、ここでもう一度、「発狂」という言葉について考えてみたいと思う。

\*

\*

例えば、有名な芥川龍之介という作家は、その最晩年の『或阿呆の一生』という作品の中で、彼は、「……『或阿呆の一生』（いわば自分の一生）を書き上げた後、（中略）、彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった」とある。しかも、友人の宇野浩二という人が「発狂」したというようなことを聞いて、芥川龍之介自身、「……自分でも強度の神経衰弱よりして発狂するかも知れない」と冗談に語り、さらに、「……いや、自分は発狂する前に死ぬ」というような言葉さえ残しているのである。もちろん、芥川龍之介の「自殺」の理由には、実にいろいろな要因（数多く）があつたかと思うが、その一つには「こういう想い」もあつたということである。そして、この「神経衰弱」という問題をなげ敢えて再び取り上げるのかと言えば、前述のように、明治以降の日本人、いや、古今東西を問わず、世界中の実に数多くの「知識人」たちが、この「神経衰弱」というものに、多かれ少なかれ、深く悩み苦しんでいるという理由からであり、そして、もう一つの理由は、次のようなことである。

つまり、古今東西を問わず、世界中の実に数多くの「知識人」たちが、なぜ「神経衰弱」というものに、多かれ少なかれ、深く悩み苦しむようになるのかと敢えて問えば、それは、そのような人たちは、若い時には、自分でももう全く手に負えないほどのもの凄い「知識欲」（或いは「真善美欲」）などに襲われることになり、それゆえ、当然のことながら、無限に果てしなくどこまでも本格的な「思考（思索）活動」を何年も何十年も積み重ねるようになり、そうなると、今まではそうだと思つていたことも、実はそうではなく、それではこうなのかと次から次へとその「考え方」を新たにしていこううちに、今までの価値観や道徳観或いは様々な既成概念などがばらばらに空中分解してしまう、また、自分というあれこれの性格や考え方なども空中分解して、もう何がなんだか自分でもよく分からないような世界に深く陥つてしまうわけである。それが、まさに「虚無の世界」であり、そのような「虚無の世界」（それは「この世の意味や価値などがうすれてしまう虚無主義的な世界」へと深く陥るとともに、それに必ず付随する「神経衰弱」という精神的な不安定な状態にもなり易いが、しかし、それらを踏み超えた先に、実は「内的成長」の一つの到達点があるということである。

## 二、第二章

さて、「物語」を前に進めたいと思うが、その「本文」は、次のようなものである。つ

まり、「……翌年、監察御史、陳郡の袁滂という者、勅命を奉じて嶺南に使し、遂に商於の地に宿った。次の朝未だ暗い中に出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人喰虎が出る故、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、今少し待たれたが宜しいでしょうと。袁滂は、しかし、供廻の多勢なのを恃み、駅吏の言葉を斥けて、出発した。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、あわや袁滂に躍りかかると見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で『あぶないところだった』と繰返し呟くのが聞えた。その声に袁滂は聞き憶えがあった。驚懼の中にも、彼は咄嗟に思いあたって、叫んだ。『その声は、我が友、李徴子ではないか？』袁滂は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少かった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁滂の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかったためであろう」（本文）とある。

\*

\*

まず、この『山月記』という作品は、事実上、「二人の人物」が登場をして、あれこれ語るだけである。一人は、主人公の「李徴」であり、そして、もう一人は、彼のかつての親友「袁滂」という人である。この人は、主人公の「李徴」とは違って、温厚な性格であり、今や立身出世をして、まさに「監察御史」（それは「官吏の監察や地方を巡察して行政を監視する役」という高位の官職に就いていた。彼（袁滂）という人は、李徴が発狂して行方不明になった、その翌年、皇帝から直接の「命令」（勅命）を受けて、東の「嶺南」という地に遣わされた。その途の途中、（たまたま）商於という地で宿を取ったということである。そして、「……次の朝、未だ暗い中に出発しようとしたところ、駅吏（宿場役人）が言うことに、これから先の道に人喰虎が出るので、旅人は白昼でなければ、通れません。今はまだ朝が早いので、今少し待たれたが宜しかろうと云うのであった。しかし、袁滂は、お供の者が大勢なのを恃みにして、駅吏（宿場役人）の言葉を斥けて、出発してしまった。残月の光をたよりに林中の草地を通って行った時、果して（駅吏の言った通り）、一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。そして、虎は、あわや袁滂に躍りかかると見えたが、忽ち身を翻して、元の叢に隠れた。叢の中から人間の声で、『あぶないところだった』と繰返し呟くのが聞えた。その声に袁滂は聞き憶えがあった。驚懼（驚き恐れ）の中にも、彼は咄嗟に思いあたって、叫んだ。『その声は、我が友、李徴子（子は尊敬）ではないか？』袁滂は李徴と同年に進士の第に登り（科挙に合格して）、友人の少かった李徴にとつては、最も親しい友であった。温和な袁滂の性格が、峻峭（厳しい）李徴の性情と衝突しなかったためであろう」となるのである。

\*

\*

そして、「……叢の中からは、暫く返辞が無かった。しのび泣きかと思われる微かな声時々洩れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。『如何にも自分は隴西の李徴である』と。——袁滂は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した（久し振りに会って話をした）。そして、何故叢から出て来ないのかと問うた。李徴の声が答えて云う。自分は今や異類（虎）の身となつてゐる。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつ又、自分が姿を現せば、必ず君に畏怖嫌厭の情を起させるに決つてゐるからだ。しかし、今、図らずも故人に遇うことを得て、愧赧の念（恥じて顔を赤らめる気持ち）をも忘れる程に懐かしい。どうか、ほんの暫くでいいから、我

が醜悪な今の外形を厭わず、曾て君の友李徴であったこの自分と話を交してくれないだろうか。——後で考えれば不思議だったが、その時、袁滲は、この超自然の怪異を、実に素直に受容れて、少しも怪もうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行を停め、自分は叢の傍に立って、見えざる声と対談した。都の噂、旧友の消息、袁滲が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁滲は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた。草中の声は次のように語った」（本文）とある。

\*

\*

この辺のところは、このままで十分であるが、李徴は、なぜ姿を見せないのかと敢えて問えば、それは、どうしておめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。また、必ず君に「畏怖嫌厭の情」（つまり「恐れ嫌がる情」）を起させるに決っているからとある。この「心理」というのは、例えば、その人の「容貌や境遇」その他などが酷く悪化してしまい、それゆえ、なるべく知人や友人その他の人にも「会いたくない」（或いは「知られたくない」というような「心理」に近い。それは、なぜか？、それは、結局、自分が「惨め」に思えるからである。ましてや、自尊心の人一倍強い「李徴」という人であれば、なおさらのことである。それでは、なぜ「袁滲」からすぐにも逃げ出さずに、話をしようとしているのだろうか？　ここが最も大事なところであるが、それは、主人公の「李徴」という人は、いわば「発狂」をして、なぜか「虎」へと変身して以来、彼は、ずっと誰とも話をしていないのである。それは、あまりにも長い「孤独」であり、一般に、あまりに長い「孤独」は、その人の「心」を狂わせるものである。だからこそ、「話し相手」というものが必要になるのである。われわれ人間の「精神」というものを健全に保つためにも、どうしても「話し相手」というものは必要不可欠になるといふことである。

しかし、それは、誰でもよいということではない。つまり、主人公の「李徴」という人は、かつての親友「袁滲」であればこそ、自分のこのような「身の上話」をしてもよいと思っただけである。——それは、一体、なぜなのか？　それは、まず、かつての親友「袁滲」と親しく「……都の噂、旧友の消息、袁滲が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後、袁滲は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを訊ねた」とある。その時、主人公の「李徴」という人は、かつての親友「袁滲」という人は、今や「監察御史」（それは「地方を巡察して行政を監視する役」という高位の官職に就いていながらも、（自分を少しも見下げることもなく）、あの頃と少しも変わらない彼のその「人間性」を見て、まさに（心の底から）「人間として信頼できる人物」と見て取ったということである。——つまり、「袁滲」ならば、人間として信用できる、信頼してもよい。だからこそ、しばしのためらいのあと、自分のこのような「身の上話」をしてもよいと思っただけである。そして、主人公の「李徴」という人は、次のように語るのである。

### 三、第三章

それは、「……今から一年程前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊った夜のこと、一睡してから、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見

ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた。自分は初め眼を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうしても夢でないと悟らねばならなかった時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になつたのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。自分は直ぐに死を想うた。しかし、その時、眼の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見た途端に、自分の中の人間は忽ち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血に塗れ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であつた。それ以来今までにどんな所行をし続けて来たか、それは到底語るに忍びない(本文)とある。

\*

\*

さて、この「告白」部分は、まさに書いてある通りであるが、まず、「……(深夜)、ふと眼を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出て見ると、声は闇の中から頻りに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆けて行く中に、何時しか途は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地を攫んで走っていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えて行った。気が付くと、手先や肱のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなつてから、谷川に臨んで姿を映して見ると、既に虎となっていた」とある。これは、まさに「……人間から虎へと変身していく過程」を、その実に事細かな「心身の変化」過程を、まるで自ら「実況中継」しているような描写になっている。

それでは、一体、誰が「我が名」を呼ぶのだろうか？ それは、例えば、何らかの「薬物中毒」などで自分の「精神」に異常を来したような時には、よく「幻聴・幻視」などを経験することがあると聞く。——つまり、まさに「精神」に異常を来たして、何らかの「幻聴・幻視」などを見聞きし、その「声(や姿)」などに導かれて、わけも分からず、その「声(や姿)」などを追うて走り出すこともあるのかも知れない。もちろん、その身が「虎」に変身するようなことはないが。……例えば、酒を浴びるほど飲んで「泥酔」状態に深く陥った人がいて、その人は、その後の「記憶」が完全に消えて、気がつく、(つまり「人間に戻る」と)、自分はベットのの上に寝かされていたというようなことは、よく経験することではないかと思う。そして、自分はこうしてここにこうしているのかと尋ねた時に、相手の人は、「……昨夜は、あれから大変だったんだから、とにかく、わけもなく、大声で叫んだり、また、暴れまわったりして、もうどうにも手に負えないほどの『大虎』だったんだから、覚えてないの？」と云つたとする。その場合、その人は、まさに「……人間から人間ではなくなる精神状態」を実際に経験していたことになるのだろう。つまり、人間が人間でなくなる一つは、すなわち、過去の「記憶」が消えてしまうということである。

例えば、誰もがよくご存知の、いわゆる「記憶喪失」というものがある。それは、一体、

どのようなものかと問えば、それは、自分の「過去の記憶」が思い出せないという状態であり、そうすると、その人は、「……ここはどこ？ わたしはだれ？」という精神状態に深く陥りやすいということである。つまり、われわれ人間というのは、ふつうであれば、二、三才の頃からの「記憶」とともに、今日まで生きてきた「全過去」（つまり「全体験、全経験、全学習、全思い出、その他」）の実に膨大な量の「蓄積」の中から、もう何があっても絶対に思い出すことの出来ないものと、一方、何とか思い出せるような膨大な量の過去の「記憶の蓄積」が誰にもあるわけである。そして、その膨大な過去の「記憶の蓄積」があればこそ、自分は、今日までどのように生きてきて、そして、どのような性格の人間であるかなどの、まさに「自己認識」というものは、初めて可能になるということである。それゆえ、そのような膨大な過去の「記憶の蓄積」が思い出せないような精神状態になってしまうと、まさに「……ここはどこ？ わたしはだれ？」という精神状態に深く陥りやすくなるのである。——つまり、われわれ人間が人間でなくなるという「確たる根拠」としての、その一つは、まさに人間としての「ものを考える能力」がどんどん低下していくことと、もう一つは、その人の膨大な過去の「記憶の蓄積」がどんどん薄れていくということであり、その一つの有名な具体的な「実例」としては、まさに「痴呆症」という病気があるということである。もちろん、主人公の「李徴」という人は、いわゆる「痴呆症」ではないが、しかし、精神面では、その「痴呆症」（特に「若年性痴呆症」）に近いような「精神状態」を実際に経験しているということである。

そして、次に「興味深い」のは、次の言葉（文章）であり、それは、「……全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」というところである。この「文章」が、なぜ「興味深い」のかと言えば、それは、次のようなことである。——まず、われわれ人間というのは、両親の「遺伝子」を半分ずつ受け継いで、この世に生まれて来る。それは、今日ではよく知られていることだが、しかし、それでは具体的に自分の一つ一つの「目、鼻、口、耳、その他の顔全体、また、腕、手、脚、足、指、その他」、つまり、自分の「容姿・容貌」が一体どうしてこういう「姿・形」であるのかを初めとして、なぜ、どうして自分はこのような「病気や事故或いはまた境遇や出来事、その他」などにめぐり遭わなければならないのか？ そのような「理由」については、ある程度までは推察でき得るとしても、しかし、厳密にはよく分からないものである。つまり、「……全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」ということにもなるのである。もちろん、今日では、例えば、様々な「美容整形」やその他などによって、自分の「容姿・容貌」などを人工的に矯正するようなことはいろいろと可能ではあるが。……

\*

\*

それでは、次の「本文」であるが、それは、「……ただ、一日の中に必ず数時間は、人間の心が還つて来る。そういう時には、曾ての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、経書の章句を誦んずることも出来る。その人間の心で、虎としての己



して、不安というものは消えて、幸せな気分になっていった」というのである。

一方、「左脳」の機能が回復してくると、今まで「すべてが曖昧であった状態」から、だんだんと色々なものが「区別」でき得るようになって来て、やがて、本来の「人間らしい思考」もでき得るようになるという話でした。——例えば、われわれ人間というのは、一般的に、人間以外の他の動物たちをなぜか「人間より遙かに不幸な存在である」ととかく思いがちであるが、しかし、いわゆる「本能的部分」に強く支配されている人間以外の他の動物たちというのは、意外に人間よりも「幸せな精神状態」にあるのかも知れない。

例えば、その「本文」のなかにも、「……今少し経てば、己の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋れて消えて了うだろう。ちょうど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。(中略)、己の中の人間の心がすっかり消えて了えば、恐らく、その方が、己はしあわせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になった者でなければ……」とある。

まず、本文の「古い宮殿の礎」というのは、まさに「人間の心」(或いは「過去の記憶」ということ)であり、また、それが次第に「土砂に埋没する」とは、すなわち、「獣の心」(或いは「獣としての習慣」)などに支配されて、「人間の心」(或いは「過去の記憶」)が消えてしまうということである。それでは、なぜ、「……その方が、己はしあわせになれるだろう」と言っているのだろうか？ それは、「人間の心」に戻ると、本文では、「……その人間の心で、虎としての己の残酷な行のあとを見、己の運命をふりかえる時が、最も情なく、恐しく、憤ろしい」というように、実に色々と思ひ悩み苦しむことになるからである。それゆえ、むしろ「人間の心」が完全に消えてしまったほうが、かえって、「そのようなことと思ひ悩み苦しむことがなくなる」からである。

それでは、なぜ、「……だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐しく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思っているだろう！ 己が人間だった記憶のなくなることを。この気持は誰にも分らない。誰にも分らない。己と同じ身の上になった者でなければ……」とある。もちろん、この「気持」は、人間として余りにも当然な「気持」ではあるが、その「気持」を誰よりも真に深くわが身に感じて実感としてよく理解でき得る人たちがいるとすれば、それは、恐らく、まさに「痴呆症の人たち」(特に「若年性痴呆症の人たち」)かも知れない。——それは、なぜかと言えば、それは、自分はまだこんなに若いのに、なぜ、どうして、という気持ちであり、それは、人間としての「ものを考える能力」がだんだんと低下していくという恐怖とともに、人間としての過去の膨大な「記憶の蓄積」がだんだんと薄れていくというような恐怖を、まさに「実感」しているからである。そして、主人公の「李徴」という人は、「……己がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んで置きたいことがある」と云うのであった。

#### 四、第四章

それでは、次の「本文」であるが、それは、「……袁滲はじめ一行は、息をのんで、叢中

の声の語る不思議に聞入っていた。声は続けて言う。——他でもない。自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。これを我がために伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいのでは、死んでも死に切れないのだ。——袁滲は部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁滲は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか（本文）とある。

\*

\*

さて、この「章」で特に興味深いのは、次の「文章」であり、それは、「……自分は元来詩人として名を成す積りでいた。しかも、業未だ成らざるに、この運命に立至った。曾て作るところの詩数百篇、固より、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在も最早判らなくなつていよう。ところで、その中、今も尚記誦せるものが数十ある。これを我が為に伝録して戴きたいのだ。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えたいのでは、死んでも死に切れないのだ」とある。

つまり、主人公の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ことが、何よりも「第一の願い」であつた。それは、冒頭の「本文」のところでも、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」とある通りである。そのためにこそ、主人公の「李徴」という人は、「……地方の役人の職を辞して、故郷に帰り、人との交わりを絶つて、ひたすら詩作に耽つた」ということである。ところが、道なかばで発狂して「虎」に変身してしまつた。しかし、かつてそのようにして生み出した「詩」は、数百篇あるが、未だ世間に「発表」（公表）されていないままである。——ところで、その中に、今でも尚「記誦せるもの」（つまり「記憶していて、暗唱しているもの」）が数十ある。これを我が為に「伝録」（記録し、伝え）て戴きたいというのが、主人公「李徴」という人の、まさに「切なる（心の底からの）願い」なのである。何も、これに仍つて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙（良し悪し）は自分では分らないが、とにかく、財産を破綻させ、妻子に貧窮の「苦しみ」まで味わせ、さらにわが身の心まで「狂わせ」（発狂させるまで）自分が生涯それに執着したところのもの、つまり、すべてを投げ捨ててまでひたすら詩作に耽つて生み出した詩数百篇、その一部なりとも後代に伝えたいのでは、（自分はもう）死んでも死に切れない」という想いである、と云うのであつた。……

一方、「袁滲」という人は、その「李徴」の心の底からの「願い」を快く受け入れては、「……部下に命じ、筆を執つて叢中の声に随つて書きとらせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁滲は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流

の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか」と思ふのであつた。それは、一体、なぜか？ それを敢えて一言で言えば、それは、どこか「人間性に欠るところがある」ということになるのだらう。或いは、「作品」そのものこそ、第一であり、一方、「名が残る残らない」は、結果に過ぎず、その「名を残す」ということにこだわり過ぎてゐるのかも知れない。それをもっと分かりやすく言えば、あまりに「自分のことばかりにとらわれ過ぎてゐる」ということである。

例えば、「詩境」に深く溶け込んでゐるような時には、ふだんの様々な「欲望や感情」などに振りまわされてゐる雑然とした「自我」の状態から離れて、より密度の高い、それだけ自分自身になりきれてゐる「純粹自己」の状態になつてゐるような時であり、それは、例えば、学者でも、芸術家でも、文筆家でも、詩人でも、その他、どのような分野の誰であつてもよいわけだが、何か本格的な「思考（思索）活動」や何らかの「創作活動」などに深く溶け入つてゐるような時にこそ、まさに「より密度の高い」（それだけ自分自身になりきつてゐる「純粹自己」の状態になつてゐて、そのような時には、あまり疲れを感じない。それは、尋常ならぬエネルギーが全身に満ちて来るからであり、この時ほど自分自身になりきつて生きてゐる時はなく、まったくの「自足状態」に近いものである。そして、そのような一種の「没我的状態」になつて、本格的な「思考（思索）活動」や「創作活動」などにどこまでも深く溶け入つてゐるような時にこそ、いわゆる「精神の飛翔」というようなものは、生じやすくなり、何か自分の「力（力量）」以上の真に優れた「芸術作品」などが生み出されたり、また、未だ人類によつて解明されていないような様々な物事の「真実、真理、その他」などが、その人の「思惟界」で観て取れることが、非常に多くなるということである。——例えば、晩年のゲーテも、「……偉大なものは、ひたむきで、純真で、夢遊病者のような創造力によつてのみ産み出されるものである。」（『ゲーテとの対話』下）という言葉を残してゐるが、この言葉なども、まさに超「自我」の状態からこそ、真にすぐれたものが生み出されるということを表現してゐるものである。

\*

\*

それでは、その次の「本文」であるが、それは、次のようなものである。「……旧詩を吐き終つた李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るが如くに言つた。羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれてゐる様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわつて見る夢にだよ。嗤つてくれ。詩人に成りそこなつて虎になつた哀れな男を。（袁滲は昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた）。そうだ。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きてゐるしるしに。

袁滲は又下吏に命じてこれを書きとらせた。その詩に言う。

偶因狂疾成殊類 災患相仍不可逃

今日爪牙誰敢敵 当时声跡共相高

我為異物蓬茅下 君已乘輶氣勢豪

此夕溪山对明月 不成長嘯但成阜

時に、残月、光冷やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げてい

た。人々は最早、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

\*

まず、主人公の「李徴」という人は、なぜ、どうして「……旧詩を吐き終ったあと、突然調子を変えて、自らを嘲るが如くに言う」ような「精神状態」へと変化したのだろうか？ それは、次のようなことである。——つまり、主人公の「李徴」という人は、道なかばで発狂して「虎」に変身してしまった。それゆえ、自分はこのまま「虎の身」としてただ死んでいくだけなのかと、密かに「懼れ、嘆き、孤独、深く悩み苦しん」でいたのである。ところが、たまたま若い頃の親友であった「袁滲」という人が、その途を通りかかすることで、久しぶりに親しい「人間」（つまり「袁滲」にめぐり逢えたとともに、その「袁滲」と親しく「……都の噂、旧友の消息、その他、青年時代に親しかった者同志の、あの隔てのない語調で、それ等が語られた後」で、主人公の「李徴」という人は、なぜ、このような「身の上」になったのか、その「経緯」を事細かに語ってから、自分がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つだけお願いがあるということ、それは、もともと詩人として「名を残そう」として、かつて生み出した詩数百篇があり、その一部なりとも後代に伝えないでは、（自分はどうも）死んでも死に切れない」という想いを語るのである。そこで、「袁滲」という人は、その「願い」を快く受け入れては、「……部下に命じ、筆を執つて叢の中から朗々と響いた詩を書きとらせるのである。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである」とある。これによって、自分の「詩」が後代に残る可能性が出て来たということである。

だからこそ、まさに「……旧詩を吐き終った」あと、一気に「心が解放」されて、その「心の解放感」からこそ、突然調子を変えて、自らを嘲るが如くに云うのである。それは、「……羞しいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、己は、己の詩集が長安風流人士の机の上に置かれている様を、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人に成りそなうって虎になった哀れな男を」となるのである。——しかし、ここにこそ（つまり「自分の詩集が長安風流人たちの机の上に置かれていて、それが読まれている様こそ」）は、まさに主人公「李徴」が最初からずっと「頭の中」（或いは「心の中」）で想い描いていた「夢」そのものであり、それこそは、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」という言葉の具体的な「真意」になるのである。

一方、親友「袁滲」という人は、「……昔の青年李徴の自嘲癖を思出しながら、哀しく聞いていた」とある。それは、この詩人の「性格と数奇な運命」を思ったということであるが、一方、「李徴」は、「……そうだ。お笑い草ついでに、今の懐いを即席の詩に述べて見ようか。この虎の中に、まだ、曾ての李徴が生きているしに」ということで、次のような「七言律詩」を即興で創り出し、そして、袁滲は又下吏に命じてこれを書きとらせるのであった。

\*

偶狂疾に因りて殊類と成る  
今日の爪牙 誰か敢て敵せん  
我異物と為りて 蓬茅の下

\*

災患相仍つて 逃るべからず  
当時の声跡 共に相高し  
君已に輶に乗じて 氣勢豪なり

此の夕べ 溪山 明月に對し

長嘯を成さず 但だ阜を成す

たまたま心を病んで狂気となるにより、けものになつてしまった。いろいろな災患が重なり、この運命から逃れることができない。

爪や牙を持つ虎の身となつた今では、誰が敢えて刃向かうだろうか。当時、あの頃の二人の評判は、ともに秀才として讃えられたものだ。

ところが、今、自分はけもの身となつて草むらに隠れ、

君はすでに出世して車に乗り、その権勢は頗る高いものがある。

この夕べ、谷川や山々を明るく照らす満月に向き合い、

自分は詩を吟ずることなく、ただ悲しく吠え叫ぶのみである。

時に、残月、冷やかに光り、白露は地にみちて、樹々の間を渡る冷たい風は、すでに暁の近いことを告げていた。人々は最早、事の不思議さを忘れて、肅然（静かに整然）として、この詩人の「薄倖」を嘆いた。李徴の声は、さらに続くのであった。

## 五、第五章

李徴は、「……何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考えよ  
うに依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であつた時、己は努めて人との交  
を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いもので  
あることを、人々は知らなかつた。勿論、曾ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心  
が無かつたとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。己  
は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨  
に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍することも潔し  
としなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非  
ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信  
ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。己は次第に世と離れ、人と遠  
ざかり、憤悶と慙恚とによつて益々己の内なる臆病な自尊心を飼ふとらせる結果にな  
つた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場  
合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友  
人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了つたのだ。  
今思えば、全く、己は、己の有つていた僅かばかりの才能を空費して了つた訳だ。人生は  
何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句  
を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭  
う怠惰とが己の凡てだつたのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを專一に  
磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は  
漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には  
最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作つた  
にしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行  
く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己

は、向うの山の頂の巖に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えた  
いのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って咆えた。誰かにこの苦しみを分って貰えないかと。  
しかし、猷どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一  
匹の虎が怒り狂って、哮っているとしたか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己  
の気持を分ってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理  
解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない(本文)  
とある。

\*

\*

さて、この「第五章」こそ、「作者」(中島敦)という人の彼自身の「考え方」がはっ  
きりと表れているところであるが、その前に、原典の『人虎伝』を見てみたいと思う。  
まず、原典の『人虎伝』という作品の中では、「……隴西の李徴は、皇族の子なり」と  
ある。そして、博学で、立派な詩も書き、天宝十年、科挙に合格をして、やがて、江南尉  
になっっている。それゆえ、自尊心も高く、性格も荒つぽく、才能を恃んで倨傲(おごり高  
ぶり)、低い官職に屈することができず、つねに鬱鬱(不平不満)を抱いて楽しまず、同  
じ役所の会合で、宴もたけなわになるといつも、私が君たちの仲間になれるだろうか、と  
言っていたので、同僚の人たちからは、憎まれていたのである。こういう「性格」が、い  
わば「虎」へと変身する一つの「要因」にもなっているのだろう。……

次に、「……我に旧文数十篇有り。(中略)、君我が為に伝録せば、誠に文人の口闕に列  
すること能はざるも、然れども亦子孫に伝ふるを貴ぶなり」とある。つまり「……旧詩数  
十篇あるが、君がもし私のために伝録(記録し伝えて)くれれば、文人の仲間に加わるこ  
とはできなくとも、子孫に伝えることができるのを貴ぶのである」とある。つまり、『人虎伝』  
の中の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ということ、つまり、「……詩家と  
しての名を死後百年に遺そう」というような想いは全くないのであり、ただ、自分の「子  
や孫」のために数十篇の「詩」を遺すことができれば、それでよいということである。

最後に、原典の『人虎伝』の中の「李徴」という人は、なぜ、自分は「虎」へと変身し  
たのかという「理由」付けについては、「……南陽の郊外に於いて、かつて一孀婦に私  
す。其の家窃かに之を知り、常に我を害する心有り。孀婦は是に由りて再び合ふを得ず。吾因  
りて風に乗じて火を縦ち、一家数人、尽く之を焚き殺して去る。此れを恨みと為すのみ」  
とある。その「内容」は、「……かつて私は南陽の郊外で一人の未亡人と密通をしていた。  
その家の人は窃かにこのことを知って、いつも私を殺害しようとしていた。未亡人は、こ  
れにより(私と)二度と会うことはできなかった。そのために、私は、風に乗じて家に火  
を放って、一家数人すべて焼き殺して逃げたのである。このことを残念に思うのみ」とい  
う内容になっている。これは、一家数人すべて焼き殺すという人間として極めて「非道か  
つ残酷な行為」であり、その「報い」として、いわば「虎」へと変身してしまったという、  
そういう、いわば「因果応報」的な内容になっているのである。

\*

\*

一方、『山月記』の「作者」(中島敦)の場合は、まず、隴西の「李徴」は、「皇族の子」  
ではなく、むしろ「一般人」に設定を変えている。それは、一体、なぜか? それは、特  
定の「人間」(皇族)ではなく、多くの人達にあてはまる「物語」に設定し直しているの  
である。次に、『山月記』の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ことが、何よ

りも「第一の願ひ」であり、それは、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」とある通りである。そのためにこそ、主人公の「李徴」という人は、「……地方の役人の職を辞して、故郷に帰り、人との交わりを絶つて、ひたすら詩作に耽つた」ということである。ところが、道なかなばで発狂して「虎」に変身してしまった。しかし、かつて生み出した「詩」は、数百篇あり、その中に、今でも覚えている詩が数十ある。これを我が為に「伝録」（記録し伝えて）頂きたいというのが、主人公「李徴」の心の底からの「願ひ」であり、それは、財産を破綻させ、妻子に貧窮の「苦しみ」まで味わせ、さらにわが身の心まで「狂わせ」（発狂させるまで）自分が生涯それに執着したところのもの、つまり、すべてを投げ捨ててまでひたすら詩作に耽つて生み出した詩数百篇、その一部なりとも後代に伝えないでは、（自分はもう）死んでも死に切れないという想いなのである。

そして、もう一つ、原典の『人虎伝』とその内容が全く全然違っているのは、一体、何かと問えば、それは、なぜ、自分は「虎」へと変身したかの「理由」付けであるが、しかし、その「違い」こそは、まさに「中島敦」という作家がこの『山月記』という作品の中で「最も言いたかった」ことであり、それをもっと敢えて言えば、結果として、この「章」が書きたくて、『山月記』を書いたと言つてもよいくらいである。そして、この「三つ」以外は、基本的には原典の『人虎伝』とそれほど変わるところはないのである。

\*

\*

それでは、その「本文」を順を追つて考えてみたいと思うが、それは、次のようなものである。つまり、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった」とある。まず、ここまでを考えてみたいと思うが、主人公の「李徴」という人は、なぜ、自分は「努めて人との交を避けてきた」かと言えば、人々はそれを「倨傲だ、尊大だ」と言つたが、しかし、実際は、それが殆ど「羞恥心」に近いものであった、と素直に告白している。——例えば、「太宰治」という人は、自分の「人間への恐怖心」（人間恐怖）を隠すために、自分は「道化」を演じていたと素直に告白している。つまり、心の中の「本当の自分」（臆病な自分）を隠すため（知られないため）に、表面的には「道化」や「無頼漢」、その他を装つて、いたということである。

一方、主人公の「李徴」という人は、「羞恥心」から、まさに「人との交を努めて避けてきた」とある。この「羞恥心」というのは、辞書では「恥ずかしく感じる気持ち」とあるが、例えば、有名な「人見知り」というのは、まさに「警戒心や恐怖心」などから生じて来るものであり、また、例えば、それは、どういうことであれ、自分の「……容姿・容貌、身分、家柄、学歴、職歴、収入、年齢、能力、成績、言動、境遇、結果、その他」、何であれ、それが劣っていると感じるような時には、いわば「恥ずかしいと思う気持ち」（或いは一種の「劣等感」）などが生じやすくなると共に、そのような「羞恥心」というものは、その人が積極的に「活動」（言動）することや、また、人と積極的に交わることなどを妨げる「一つの要因」にもなり得るが、また、一方では、「……不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情を生み出す「一つの要因」にもなり、また、時には「過激な行動」（言動）などへと駆り立てる、「一つの要因」にもなり得るものである。——つまり、われわれ人間というのは、結局、誰であれ、多かれ少

なかれ、自分が「傷つくこと」を何よりも恐れているということである。

\* \*  
それでは、その次の「本文」であるが、それは、「……勿論、曾ての郷党（郷里）の鬼才といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいべきものであった。己は詩によつて名を成そうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又、己は俗物の間に伍する（仲間となる）ことも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば（半分）信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた」とある。

まず、右の「本文」の中の「自尊心」という言葉であるが、この「自尊心」という言葉には、大きく二つの「意味合い」があり、その一つは、「自分の存在自体を大事に思う気持ち」というものであり、そして、もう一つは、「自分の思想や言動或いは文学や芸術その他」などに自信をもち、他からの干渉を排除する態度」というものである。――例えば、動物には、「快・不快」の大原則があるが、それは、「……自分にとって心地よいものは受け入れ、自分にとって不快なものは拒絶する」というものであり、これなどは、「自分を大事に思う気持ち」からであり、また、われわれ人間には、「……ほめられればうれししいし、けなされれば腹が立つ」という大原則もある。つまり、「ほめられる」とは、すなわち、「自分の存在や才能が認められた」ということであり、また、「けなされる」とは、すなわち、「自分の存在や才能が否定された」ということである。その場合、「自分の存在」がけなされれば、「自分を大事に思う気持ち（自尊心）」が傷つけられ、また、「自分の才能や能力」などがけなされれば、それは、まさに「自分の自尊心が傷つけられた」ということになるのである。――例えば、自分の「思想や言動或いは文学や芸術その他」、何であれ、それらを他人からぼろくそに言われれば、それこそ、烈火の如く「激しく怒り狂う」のも、まさに「自分の自尊心が深く傷つけられた」という理由からである。それらどころであれ、そのような時には、相手に対する「……不平、不満、怒り、嫌悪、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情などが生じ易くなるということである。――つまり、人間も動物も本来自分が「傷つく」ことを何よりも厭がっているのである。

次に、有名な「臆病な自尊心」という言葉であるが、この「言葉」をもっと分かりやすく表現し直せば、それは、一方では何らかの「自信」（自負心）から「おごり高ぶり」ながらも、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」ということであり、例えば、主人公の「李徴」という人も、まさに「一方では自負心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」から、まさに「人との交を努めて避けてきた」ということになるのである。また、もう一つの「尊大な羞恥心」という言葉も、その「言葉」をもっと分かりやすく表現し直せば、それは、まさに外的には、何らかの「自信」（自負心）から尊大（おごり高ぶつた強い態度）を見せながら、一方、内面では、自分の「羞恥心」（それは「傷つきやすい心」をも隠し持っていて、そのために、主人公の「李徴」という人は、「……己は詩によつて名を成そうと思ひながら（一流の詩人になろうと志を立てながら）、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨するような

努力を怠ってしまった。かといって、又、己は俗物の間に伍する（それは「こんな俗物や凡才な人たちと交わり仲間となる」ことも潔しとしなかった（自分の自尊心が許さなかった）。共に、我が「臆病な自尊心」（それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」と、「尊大な羞恥心」（それは「自信《自尊心》からおごり高ぶった尊大な態度を見せながらも、自分の心の中にはいつも傷つきやすい羞恥心も同時に隠し持っていた」）所為である。己の珠に非ざることを（自分には詩の才能がないのではないかと）惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうとせず（進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して詩の才能をさらに磨き上げようとする努力を怠り）、（その結果、真に傑出した詩家とはなり得なかった）。又、己の珠なるべき（自分には詩の才能があること）を半ば（半分は）信ずるが故に（その自尊心から）、まさに「おごり高ぶり」、碌々として瓦に伍すること（同じく「こんな凡庸・凡才な人たちと交わり仲間となること」も自分には、どうしても出来なかつたということである。

\*

\*

それゆえ、「……己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の有っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸それに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれるような悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろ、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪らなくなる。そういう時、己は、向うの山の巖に上り、空谷に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向って咆えた。誰かにこの苦しみが分って貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしたか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分ってくれる者はない。ちようど、人間だった頃、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかつたように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない」（本文）とある。

\*

\*

では、その内容であるが、「……己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった」とある。——つまり、主人公の「李徴」という人は、次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚（不満や嘆き或いは怒りや恨みその他など）によって益々自分の内なる「臆病な自尊心」（それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」）を飼いふとらせる（さらに助長させる）結果になってしまった。そして、「……人

間には誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ」とある。――つまり、人間は誰でも「猛獣使い」であり、その「猛獣」に当るのが、各人の「性情」(いわば性格)だという。自分の場合、この「尊大な羞恥心」、それは、外的には、自信(自負心)から尊大(おごり高ぶった強い態度)で人と接して、結果、人を傷つけ、一方、内面では、自分の「羞恥心」(それは「傷つきやすい心」)を隠し持っていて、その「両方」のせいで、進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して詩の才能をさらに磨き上げようとする努力を怠ってしまった。そのような「尊大な羞恥心」こそが、まさに「猛獣」だったのだ。「虎」だったのだ。これが「……自分を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、自分の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ」ということである。

そして、「……今思えば、全く、己は、己の有っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと言先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸それに気が付いた」とある。――つまり、今思えば、自分は、自分の有っていた僅かばかりの才能(詩の才能)を空費してしまったのである。それは、一体、なぜか？ それは、自分の「自尊心」(おごり高ぶり)と自分の「傷つきやすい心」(羞恥心)のせいであり、進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して、その「才能」(僅かばかりの詩の才能)をさらに磨き上げようとする努力を怠ってしまったからである。人生は何事をも為さぬには余りに長い、何事かを為すには余りに短いなどと言先ばかりの警句を弄しながら、実際は、才能の不足を暴露するかも知れないという「卑怯な危惧」(それを恐れる「自分の傷つきやすい心」と、刻苦を厭う「怠惰」(それは「進んで師や詩友と交わり切磋琢磨するという努力を怠ってしまったこと」)が、まさに「自分の凡て」だったのだ。自分よりも遥かに「乏しい才能」でありながら、それを「専一」(詩なら詩を徹底的に)磨き上げたがために、堂々たる「詩家」となった者が幾らでもいるのだ。「虎」(思いも寄らないような境遇へと陥ってしまった自分)と成り果てた今、自分は漸それに気が付いたのである。

そして、「……それを思うと、自分は今も胸を灼かれるような悔(後悔)を感じる。自分には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、自分が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしても、どういふ手段で発表できよう。まして、自分の頭は毎日に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。自分の空費された過去は？ 自分は堪らなくなる」とある。これは、例えば、深刻な病氣や身体障害或いは痴呆症、老い、死、その他、どういふことであれ、自分の「努力」だけではどうにもならないような状況に追い込まれた時には、誰でも「たまらない気持ち」に追い込まれるのではないだろうか。そして、「……そういう時、(虎と変身してしまった)自分は、向うの山の頂の巖に上り、空谷(人氣の無い寂しい谷間)に向って吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。自分は昨

日の夕方も、彼処で月に向つて咆えた。誰かにこの苦しみを分つて貰えないかと。しかし、獣どもは自分の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮っているとしたか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人『自分の気持』を分つてくれる者はない。ちようど、人間だった頃、自分の『傷つき易い内心』を誰も理解してくれなかったように。自分の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではなく、それは、自分の涙のせいでもある」のだと。そして、この「章」は、一面では、「作者」(中島敦)という人の「心境」をも反映していることになるのだろう。

## 六、第六章

では、次は「最後の本文」であるが、それは、「……漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処からか、暁角が哀しげに響き始めた。——最早、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の聲が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼等は未だ號略に在る。固より、己の運命に就いては知る筈がない。君が南から帰つたら、己は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。厚かましいお願だが、彼等の孤弱を憐れんで、今後とも道塗に飢凍することのないように計らつて戴けるならば、自分にとつて、恩俸、これに過ぎたるは莫い。

言終つて、叢中から慟哭の聲が聞えた。袁滲もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いたい旨を答えた。李徴の聲はしかし忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて、言った。

本当は、先ず、この事の方を先にお願いすべきだったのだ、己が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ。——そして、附加えて言うことに、袁滲からの帰途には決してこの途を通らないで欲しい、その時には自分が酔つていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないから。又、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上つたら、此方を振りかえつて見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為であると。

袁滲は叢に向つて、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣の聲が洩れた。袁滲も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。——そして、一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振り返つて、先程の林間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかった」(完)とある。

\*

\*

さて、その「内容」であるが、それは、「……漸く四辺の暗さが薄らいで来た。木の間を伝つて、何処からか暁角(夜明けを告げる角笛の音)が哀しげに響き始めた。——最早、別れを告げねばならない。酔わねばならない時が、(虎に還らねばならない時が)近づいたから」と、主人公「李徴」の聲が云つた。だが、お別れする前にもう一つ「頼み」がある。それは、我が「妻子」のことだ。彼等は未だ號略に在る。固より、自分の運命(虎

への変身)に就いては知る筈がない。君が南から帰ったら、自分は既に死んだと彼等に告げて貰えないだろうか。決して今日のことだけは明かさないうで欲しい。それは、一体、なぜか? それはもちろん、妻子に「余計な心配をかけたくない」ためであるが、もう一つは、自分の惨めな境遇を知られたくないという「自尊心」もあるのかも知れない。そして、厚かましいお願いだが、彼等の「孤弱」(弱々しく身寄りがいいこと)を憐れんで、今後とも道塗(道ばた)に飢凍(飢え凍えること)のないように計らって戴けるならば、自分にとって、恩倖(特別な寵愛)、これに過ぎたるは莫い、と云うのであった。

言い終つて、叢の中から慟哭(声を上げて泣く)声(こゑ)が聞えた。袁滲もまた涙を泛べ、欣んで李徴の意に副いた旨を答えた。その「願ひ」が快く受け入れられたので、主人公の「李徴」は、再び、その「心の解放感」から、李徴の声は忽ち又先刻の自嘲的な調子に戻つて云つた。「……本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、自分が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、自分の乏しい詩業の方を氣にかけているような男だから、こんな獸に身を随すのだ」とある。この「自嘲的な調子」(自分で自分をあざけるような調子)の中には、実は主人公「李徴」のいわば「本心」(心の声)も含まれているのだろう。そして、ここにこそ主人公「李徴」の「人間性の欠如が語られている」ことにもなるのである。それは、一体、どういうことかと言え、それは、主人公「李徴」という人は、まさに「……自分のことばかりにとらわれ過ぎていて、飢え凍えようとする妻子のこと(愛する『妻子の生活やその他のこと』)をあと回しにするような人間だからである」が、それがまた、主人公「李徴」の「詩」は、「……成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いないが、しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か(非常に微妙な点に於て)欠けるところがあるのではないか」という理由の「一つの根拠」にもなっているのである。つまり、あまりにも自分のことばかりにとらわれ過ぎていて、いわば「人間性に欠けるところがある」ということである。

そして、附加えて言うことには(新たな「お願ひ」としては、一つは、「……袁滲の帰途には決してこの途を通らないで欲しい」ということ。なぜなら、その時には自分が酔つていて故人を認めずに襲いかかるかも知れないからである。そして、もう一つは、「……今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、此方を振りかえつて見て貰いたい。自分は今の姿をもう一度お目に掛けよう。勇に誇ろうとしてではない。我が『醜悪な姿』を示して(ここでは自分の『自尊心』を捨てている心理状態であり、逆に言えば、叢にその身を隠していたのは、まだ『自尊心』がどこかに残っていた証拠であり)、以て、再び此処を過ぎて自分に会おうとの気持を君に起させない為である」と云うのであった。これは、親友「袁滲」への心からの「友愛」(友を大事に思い、友をあやまつて食い殺すようなことの絶対のないようにという思いの心遣い)からである。

そして、「……袁滲は叢に向つて、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上つた。叢の中からは、又、堪え得ざるが如き悲泣(悲しく泣く)声(こゑ)が洩れた。袁滲も幾度か叢を振り返りながら、涙の中に出発した。——そして、一行が丘の上についた時、彼等は、言われた通りに振返つて、先程の林の間の草地を眺めた。忽ち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼等は見た。虎は、既に白く光を失つた月を仰いで、一声三声咆哮(吠え猛つた)かと思つと、又、元の叢に躍り入つて、再びその姿を見なかつた」(本文完)とある。

さて、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出て、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮（ほろろ）（吠え猛った）とある。——それでは、その「二声三声」にはいったいどのような「思い」が込められていたのだろうか？ まず、考えられることは、自分を「虎」としてむやみに畏れるのではなく、むしろ「人間」として素直に受け入れてくれたことに對する「感謝の気持ち」、それに加えて、自分の「願ひ」を素直に聞き入れてくれたこと、一つは、「……部下に命じ、筆を執つて叢の中から朗々と響いた詩を書きとらせた。長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである」とある。これによつて、自分の「詩」が後代に残る可能性が出て来たということである。そして、もう一つは、厚かましいお願いだが、妻子の「孤弱」（弱々しく身寄りがないこと）を憐れんで、今後とも道塗（道ばた）に飢凍（飢え凍えること）のないように計らつて戴けるならば、自分にとつてこれに過ぎたる恩倖（特別な寵愛）はないとし、袁滲は、それを快く受け入れてくれたこと、それらに對する「感謝の気持ち」である。そして、もう一つは、再び、二度と会うこともないだろう、李徴にとつて、この世でのただ一人だけの「親友」であつた「袁滲」との「永遠の別れ」、その「惜別の思い」などが深く込められていたということになるのだろう。そして、再び、人々の前にその「姿」を現わすことはなかつたということである。

## 七、結び

さて、主人公の「李徴」という人は、なぜ、虎へと変身してしまつたかの「理由」づけとしては、まず、原典の『人虎伝』という作品の中では、「……隴西の李徴は、皇族の子であり、博学で、立派な詩も書き、天寶十年、科擧に合格をして、やがて江南尉になつてゐる。それゆえ、自尊心も高く、性格も荒つぽく、才能を恃んで倨傲（おごり高ぶり）、低い官職に屈する（甘んずる）ことができず、つねに鬱鬱（不平不満）を抱いて樂しまず、同じ役所の会合で、酒宴もたけなわになるといつも、私が君たちの仲間になれるだろうか、と言つていたので、同僚の人たちからは、憎まれていたのである。こういう「性格」が、いわば「虎」へと変身する一つの「要因」にもなつてゐるのだろう。そして、もう一つの「理由」づけとしては、「……南陽の郊外に於いて、かつて一孀婦に私す。其の家窺かに之を知り、常に我を害する心有り。孀婦は是に由りて再び合ふを得ず。吾因りて風に乘じて火を縦ち、一家数人、尽く之を焚き殺して去る。此れを恨みと為すのみ」とある。その「内容」は、「……かつて私は南陽の郊外で一人の未亡人と密通をしていた。その家の人は窺かにそのことを知つて、いつも私を殺害しようとしていた。未亡人は、これにより（私と）二度と会うことはできなかつた。そのために、私は、風に乗じて家に火を放つて、一家数人すべて焼き殺して逃げたのである。このことを残念に思うのみ」という内容になつてゐる。これは、一家数人すべて焼き殺すという人間として極めて「非道かつ残酷な行為」であり、その「報い」として、いわば「虎」へと変身してしまつたという、そういう、いわば「因果応報」的な内容になつてゐるかと思う。

一方、中島敦の『山月記』の中の主人公「李徴」という人は、まず、皇族の子ではなく、むしろ「一般人」に設定を変えてゐる。それは、一体、なぜか？ それは、特定の「人間」（皇族）ではなく、多くの人たちにあてはまる「物語」に設定し直してゐるのである。

次に、『山月記』の「李徴」という人は、詩人として「名を残す」ことが、何よりも「第一の願い」であり、それは、まさに「……詩家としての名を死後百年に遺そうとした」とある通りである。そのためにこそ、主人公の「李徴」という人は、「……地方の役人の職を辞して、故郷に帰り、人との交わりを絶って、ひたすら詩作に耽った」ということである。ところが、道なればで発狂して「虎」に変身してしまった。しかし、かつて生み出した「詩」は、数百篇あり、その中に、今でも覚えている詩が数十ある。これを我が為に「伝録」（記録し伝えて）頂きたいというのが、主人公「李徴」の心の底からの「願い」であり、それは、財産を破綻させ、妻子に貧窮の「苦しみ」まで味わせ、さらにわが身の心まで「狂わせ」（発狂させるまで）自分が生涯それに執着したところのもの、つまり、すべてを投げ捨ててまでひたすら詩作に耽って生み出した詩数百篇、その一部なりとも後代に伝えないでは、（自分はどう）死んでも死に切れない」という想いなのである。

そして、もう一つ、原典の『人虎伝』とその内容が全く全然違っているのは、一体、何かと問えば、それは、なぜ、自分は「虎」へと変身したかの「理由」付けであるが、まず、その前に、次のようなことを云っている。それは、「……全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く懼れた。しかし、何故こんな事になったのだろう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取って、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」とあるが、これは、これで「正しい考え方」であり、それは、人間が「虎」へと変身するという「奇つ怪な出来事」は、まさに「人智を遙かに超越している」ものであり、それゆえ、本来、その「理由は厳密には分からない」とするのが、まさに「最も正しい答え」になるのである。それはともかく、主人公の「李徴」という人は、やがて、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない」と云って、自分なりの「理由」付けをするが、その「理由」付けこそは、まさに「作者」（中島敦）の「考え方」（つまり「中島敦自身」）が最もはつきりと表れている部分になるのである。

それでは、その「内容」であるが、それは、次のように「告白」しているのである。つまり、「……何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交を避けてきた」とある。人々はそれを「倨傲だ、尊大だ」と言ったが、しかし、実際は、それが殆ど「羞恥心」に近いものであったと、素直に告白しているのである。つまり、「羞恥心」から、まさに多くは「人との交を努めて避けてきた」ということである。この「羞恥心」というのは、辞書では「恥ずかしく感じる気持ち」とあるが、例えば、有名な「人見知り」というのは、まさに「警戒心や恐怖心」などから生じて来るものであり、また、例えば、それは、どういうことであれ、自分の「……容姿・容貌、身分、家柄、学歴、職歴、収入、年齢、能力、成績、言動、境遇、結果、その他」、何であれ、それが劣っていると感じるような時には、いわば「恥ずかしいと思う気持ち」（或いは一種の「劣等感」）などが生じやすくなると共に、そのような「羞恥心」というものは、その人が積極的に「活動」（言動）することや、また、人と積極的に交わることなどを妨げる「一つの要因」にもなり得るが、また、一方では、「……不平、不満、怒り、嫌悪、嫉妬、恨み、憎しみ、憎悪、怨念、その他」の感情を生み出す「一つの要因」にもなり、また、時には「過激な行動」（言動）などへと駆り立てる、「一つの要因」にもなり得るものである。——つまり、われわれ

人間というのは、結局、誰であれ、多かれ少なかれ、自分が「傷つくこと」を何よりも恐れているのである。——もちろん、郷里の鬼才（秀才）といわれた自分に、自尊心が無かったとは云わない。しかし、それは「臆病な自尊心」とでもいうべきものであった。

では、その余りに有名な「臆病な自尊心」という言葉であるが、この「言葉」をもっと分かりやすく表現し直せば、それは、まさに「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」ということであり、例えば、主人公の「李徴」という人も、まさに「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」から、まさに「人との交を努めて避けてきた」ということになるのである。また、もう一つの「尊大な羞恥心」という言葉も、その「言葉」をもっと分かりやすく表現し直せば、それは、まさに外的には、自信（自尊心）から尊大（おごり高ぶった強い態度）を見せながら、一方、内面では、自分の「羞恥心」（それは「傷つきやすい心」をも隠し持っていて、そのために、主人公の「李徴」という人は、「……己は詩によって名を成そうと思いつながら（一流の詩人になろうと志を立てながら）、進んで師に就いたり、求めて詩友と交って切磋琢磨するような努力を怠ってしまった。かといって、又、己は俗物の間に伍する（それは「こんな俗物や凡才な人たちと交わり仲間となる」ことも潔しとしなかった（自分の自尊心が許さなかった）。共に、我が「臆病な自尊心」（それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」と、「尊大な羞恥心」（それは「自信《自尊心》からおごり高ぶった尊大な態度を見せながらも、自分の心の中にはいつも傷つきやすい羞恥心も同時に隠し持っていた」）所為である。己の珠に非ざることを（自分には詩の才能がないのではないかと）惧れるが故に、敢て刻苦して磨こうともせず（進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して詩の才能をさらに磨き上げようとする努力を怠り）、（その結果、真に傑出した詩家とはなり得なかった）。又、己の珠なるべき（自分には詩の才能があること）を半ば（半分は）信ずるが故に（その自尊心から）、まさに「おごり高ぶり」、碌々として瓦に伍すること（同じく「こんな凡庸・凡才な人たちと交わり仲間となること」）も自分にはどうしても出来なかったということである。

そして、主人公の「李徴」という人は、次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚（不満や嘆き或いは怒りや恨みその他）などによって益々自分の内なる「臆病な自尊心」（それは「一方では自尊心からおごり高ぶり、一方では臆病から傷つくことをいつも恐れている自分」を飼いふとらせる（さらに助長させる）結果になってしまった。そして、自分の場合、一つは、その「臆病な自尊心」と、もう一つは、「尊大な羞恥心」こそ、それは、外的には、自信（自尊心）から尊大（おごり高ぶった強い態度）で人と接して、結果、人を傷つけ、一方、内面では、自分の「羞恥心」（それは「傷つきやすい心」）を隠し持っていて、その「両方」のせいで、進んで師や詩友と交わり切磋琢磨して、その「才能」（僅かばかりの詩の才能）を自慢に思っ、その「才能」（僅かばかりの詩の才能）をさらに磨き上げようとする努力を怠ってしまった。そのような「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」こそ、まさに「猛獣」だったのだ。「虎」だったのだ。これが「……自分を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、自分の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ」と云うのである。

そして、もう一つの「虎」への変身の「理由」付けとしては、わが「妻子」のことを親友の「袁滲」<sup>えんさん</sup>にお願いしたあと、主人公の「李徴」<sup>りちよう</sup>という人は、自嘲的な調子で、「……本当は、先ず、この事の方を先にお願ひすべきだったのだ、自分が人間だったなら。飢え凍えようとすると妻子のことよりも、自分の乏しい詩業の方を気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮すのだ」とある。そして、ここにこそ主人公「李徴」の「人間性の欠如が語られている」ことにもなるのである。それは、一体、どういうことかと言えば、それは、主人公「李徴」という人は、まさに「……自分のことばかりにとられ過ぎていて、飢え凍えようとすると妻子のこと（愛する『妻子の生活やその他のこと』）をあと回しにするような人間だからである」が、それがまた、主人公「李徴」の「詩」は、「……成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いないが、しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないか」という理由の「一つの根拠」にもなっているのである。

\*

\*

中島敦の「名人伝」

目次

序 中島敦の「名人伝」

一、 修行

二、 不射之射ふしや

三、 霍山かくざんの頂

四、 下山

五、 晩年

六、 結び

※ 参考文献

中島敦の「名人伝」

## 中島敦の「名人伝」

例えば、中島敦には『名人伝』という非常に有名な「短編小説」があるが、この「小説」（「名人伝」）などは、幅広い層の人たちに人気を持つ、まさに「傑作」の一つではないかと思う。そして、その本文は、次のような「内容」から始まるものである。

それは、「……趙の邯鄲の都に住む紀昌という男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己の師と頼むべき人物を物色するに、当今弓矢をとっては、名人・飛衛に及ぶ者があるうとは思われぬ。百歩を隔てて柳葉を射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々飛衛をたずねてその門に入った」とある。

これは、非常に興味深い「文章」であり、それは、自分の人生の「師」を誰にするかは、その人の「人生」に決定的な「意味」を持つことになるのである。——例えば、木下藤吉郎は、最初は、今川義元の家来（松下加兵衛）に仕えたが、やがて「退転」（「解雇」）になり、次に、織田信長を選んで仕えることになる。この「判断」が、結果として、木下藤吉郎の「人生」をやがては「天下人」にまでのし上げる、まさに最初の「英断」となるのである。というのも、当時のほとんどの武将たちというのは、身分や家柄或いは地位やならわしなどを非常に重んじるタイプの人が多かったのに比べて、一方の織田信長という人は、身分や家柄或いは地位やならわしなどは全く無視した、まさに「実力主義的な」（或いは「現実主義的な」）考え方をするタイプの人であり、それゆえ、本来ならば、乞食のような百姓上がりの藤吉郎が、身分の高い織田信長のそばに直接仕えるなどということは、非常に難しい話であり、それを可能にしたのも、織田信長の、身分や家柄或いは地位やならわしなどを全く無視した、まさに「実力主義的な」（或いは「現実主義的な」）考え方によるのである。もちろん、藤吉郎は、ただ運がよかっただけではない。それだけでは、当然のことながら、天下人にはなれないのである。彼が優れていたのは、むろん、根っからの社交術に長けていたこともあるが、それに加えて、彼は、次から次へと状況に応じた「アイデア」を出し続けたことと、もう一つは、誰もが嫌がる、誰もが尻込みするようなことでも、彼は、自分から進んで、「……私にやらせて下さい、私が必ずやってみせます」と積極的に「行動（言動）」して、その結果を出して来たということと、誰もが彼（の存在）を認めざるを得ない状況を自ら創り出したということである。

### 一、修行

さて、本文に戻ると、それは、「……飛衛は新入の門人に、まず瞬きせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織台の下に潜り込んで、そこに仰向けにひっくり返った。眼とすれすれに機躡が忙しく往來するのをじっと瞬かずに見詰めていようという工夫である。（中略）、来る日も来る日も彼はこの可笑しな恰好で、瞬きせざる修練を重ねる。二年の後には、遽だしく往返する牽挺が睫毛を掠めても、絶えて瞬くことがなくなった。彼はようやくやく機の下から匍出す。もはや、鋭利な錐の先をもって瞼を突かれても、まばたきをせぬまじになっていった。（中略）、そして、ついに、彼の目の睫毛と睫毛との間に小さな一匹の蜘蛛が巣をかけるに及んで、彼はようやくく自信を得て、師の飛衛にこれを告げた……」。そして、「……それを聞いた飛衛がいう。瞬かざるのみではまだ射を授ける

に足りぬ。次には、視ることを学べ。視ることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微を視ること著のごとくなつたならば、来つて我に告げるがよい」とある。

\*

\*

これは、非常に面白い「内容」であり、それは、なぜかと言えば、それは、宮本武蔵の『五輪書』の中にも、これと同じようなことが書かれているからである。それは、「兵法の身なりの事」という項目の中で、彼は、「……(姿勢を正しくし)、目の玉うごかざるやうにして、またゝきをせぬやうにおもひて、目をすこしすくめるやうにして、うらやかに見ること也」とある。また、「兵法の目付といふ事」という項目の中でも、「……目の付けやうは、大きに広く付くる目也。観見二つの事、観の目つよく、見の目よはく、遠き所を近く見、ちかき所を遠く見る事、兵法の専(大事)也」とある。つまり、「身のあり方」というのは、まず、「……(姿勢を正しくし)、目の玉は動かさず、瞬きもしないやうにして、目を少し細めるやうにし、うらやかに(大らかに)見るやうにすること」。また、「……目の配り方は、大きくひろく配るやうにすること。観見二つの見方があるが、大事なのは、『観の目』(つまり『全体を見る眼』を強くし、一方、『見の目』(つまり『目の前の現象を見る目』は、弱くすること。そして、遠い所も近く見、近い所も遠く見る)こと。それは、カメラの「ズームような《眼》であれ!」ということである。

さて、その次の「目」の訓練方法は、本文では、「……紀昌は再び家に戻り、肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛もつて繫いだ。そうして、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下った虱を見詰める。初め、もちろん、それは一匹の虱に過ぎない。二三日たっても、依然として虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来た。そして、三月目の終わりには、明らかに蚕ほどの大きさに見えて来た。(中略)、その虱も何十匹となく取換えられて行く中で、早くも三年の月日が流れた。ある日ふと気が付くと、窓の虱が馬のような大きさに見えていた。占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。彼は我が目を疑った。人は高塔であった。馬は山であった。その他、再び窓際の虱に立向い、燕角の弦に朔蓬の籥をつがえてこれを射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いて、しかも虱を繫いだ毛さえ断れぬ」とある。そして、「……紀昌は早速師の許に赴いてこれを報ずる。飛衛は高踏して胸を打ち、初めて『出かしたぞ』と褒めた。そうして、直ちに射術の奥義秘伝を剩すところなく紀昌に授け始めた」とある。

さて、「……奥義伝授が始まってから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔てて柳葉を射るに、既に百発百中である。二十日の後、いっばいに水を湛えた盃を右腕の上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いの無いのもとより、杯中の水も微動だにしない。一月の後、百本の矢を続けて射るに、次から次と矢の尾に命中し、百本の矢は、一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いた。傍で見ていた師の飛衛も思わず『善し!』と言った」とある。むろん、漫画やアニメの世界であれば、このような「達人の妙技」は、十分あり得ることであるが、しかし、現実の世界では、なかなか難しいことになるのだろう。しかし、達人の域に達した「妙技」の凄さは、直に伝わって来るのではないかと思う。

さて、師から学ぶべき何ものも無くなった時、彼の「頭の中」(或いは「心の中」)にふとよからぬ考えが浮かんだとある。それは、「……今や弓をもって己に敵すべき者は、師の飛衛を置いて他に無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かぬ



まげざる所をしりて、身をたすけ、名をたすくる所、是兵法の道也……とある。これは、むしろ「不<sup>ふ</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>の</sup>之<sup>の</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>の</sup>」の深き「熟練」（上達）であり、それは、いわば、「優れた大工の統領」ということである。つまり、この「兵法」を真に「学び得て」は、一つは、真に「優れた大工師」になるとともに、もう一方では、真に「優れた大工の統領」にもなるということである。そして、前者は、太刀を直接使つて勝つ、まさに「太刀之太刀」であり、一方、後者は、太刀を直接使わずに勝つ、まさに「不<sup>ふ</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>の</sup>之<sup>の</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>の</sup>」である。つまり、宮本武蔵という人は、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けたその結果、ただ単に「剣術」（武芸）が上達しただけではなく、それに加えて、人間としての総合的な「内的成長（成熟）」をも同時に遂げていたということである。

そして、もう一つの「絶対的証拠」となるものは、次のようなものである。一つは、「束を離す」という項目があり、それは、「……束をはずすとゆふに、色々心ある事也。無刀にて勝つ心あり、又太刀にてかたざる心あり。さまざま心のゆく所、書付くるにあらず。能々鍛錬すべし」とある。——これは、まさに「考え方」の根本からの「発想の転換」であり、例えば、武芸者たちは、どうしても「太刀」を使つて戦い、そして、その「太刀」で相手に勝つことばかりに囚われている。しかし、「太刀」を使わずとも、敵と戦い、そして、その敵に勝つこともでき得るのではないか？（あるいは、太刀以外の「武具やその他のもの」などを使つても、敵と戦い、そして、敵に勝つこともでき得るのではないか？）、そのような根本からの「発想の転換」である。——すなわち、時には、「太刀」を直接使わずとも、敵に「勝つ方法」は、いくらでも（数多く）あるということである。

そして、もう一つは、「岩尾の身」という項目があり、それは、「……岩尾の身とい事、兵法を得道して、忽ち岩尾のごとくに成りて、万事あたらざる所、うごかざる所、口伝」とある。——例えば、宮本武蔵という人は、若い時からの凄まじいまでの「武芸修行」を何十年と積み重ねた結果として、五〇歳の時に、まさに「兵法の奥義（神髓）」を体得（会得）した「こと」にうそはなく、その「山の頂上」へと終に到達して得た「心境」（つまりは「心身の状態」）を、まさに「岩尾」のようだと表現しているのである。それに加えて、「兵法三十五箇条」の三十四番では、次のようにも語っている。

つまり、「……岩尾の身と云は、うごく事なくして、つよく大なる心なり。身におのづから万理を得て、つきせぬ所なれば、生有る物は、皆よくる心有る也。無心の草木迄も、根ざしがたし。ふる雨、吹く風もおなじこゝろなれば、此身能々吟味あるべし」とある。

まず、この「文章」のなかで最も大事な「言葉」としては、それは、「……生有る物は、皆よくる心有る也。（それは）、無心の草木も、また、ふる雨、吹く風までもみな同じこゝろなり」とある。つまり、長年の凄まじいまでの「武芸修行」の鍛錬の積み重ねによつて鍛え上げられた、その宮本武蔵の「心身の充実感」というものは、うそ偽りなく、まさに「……泰然自若として、如何なるものにも動じることのない、岩尾のような身」になつていて、ただ、そこにいるというだけで、その「存在感」を醸し出しているとともに、誰もが気後れがしてよけるようになる。つまり、わざわざぶつかつて来るような人は、ほとんど誰もいなくなり、例えば、やくざな人が何か何ぐせをつけてぶつかつて来ても、少しも動じることなく、一にらみで、相手を退けてしまう。それは、何か得体の知れない大きな「気」を感じて、安易に近づけないからである。つまり、「……相手と闘わずして、すでに相手に勝っている」ということであり、それが、まさに「不<sup>ふ</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>の</sup>之<sup>の</sup>太<sup>た</sup>刀<sup>の</sup>」というこ

とである。(例えば、そろばんの達人は、そろばんを使わずして、驚異の数を暗算で計算するようなものである。)

### 三、霍山の頂

さて、本文に戻りたいと思うが、それは、「……涙にくれて相擁しながらも、再び弟子がかかると企みを抱くようなことがあつては甚だ危ないと思つた飛衛は、紀昌に新たな目標を与えてその気を転ずるにしくはないと考えた」とある。そして、飛衛は、「……爾がもしこれ以上この道の蘊奥(奥義)を極めたいと望むならば、西の方、霍山の頂を極めよ。そこには、甘蠅老師とて古今を曠しゆうする斯道(この道)の大家がおられるはず、老師の技に比べれば、我々の射のごときはほとんど児戯(子供の遊び事)に類する。爾の師と頼むべきは、今は甘蠅師の外にあるまい」とある。

そこで、紀昌は、すぐに西に向つて旅立ち、ひたすら道を急ぎ、一月の後、彼はようやく霍山の山頂(山頂)に辿り着いた。そして、「……気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲がっているせいもあつて、白髯(白いひげ)は歩く時も地に曳きずつてゐる」。紀昌は、老人が聾(ろう)かも知れぬと思ひ、大声で来意を告げ、己が技の程を見てもらいたいむねを述べるが、相手の返事を待たずに、いきなり背に負つた弓を外して手に執つて、石碣の矢をつがえ、空高く飛び行く鳥の群に向つて狙いを定め、弓を引くと、「……一箭(一本の矢で)たちまち五羽の大鳥が鮮やかに碧空を切つて落ちて来た」とある。老人は、「……通りは出来るようじやなど、穏やかに微笑を含んで言う。「……だが、それは所詮射の射」というもの、好漢いまだ不射の射を知らぬと見える」とある。そこで、老人は、そこから二百歩ばかり離れた絶壁の上まで連れて来る。脚下は文字通りの断崖絶壁であり、遙か真下に糸のように細く見える溪流をちよつと覗いただけで、たちまち眩暈を感じるほどの高さである。その断崖から半ば宙に乗り出した危石の上につかつかと老人は駈上り、振り返つて言う。どうじや、この石の上で先刻の業を今一度見せてくれぬか。紀昌は、石に乗り、弓を射ようとするも、石の微かに揺らいで小石の落ちるを見て、石の上に伏し、脚のワナヲナ震る姿を見るや、老人は笑いながら手を差し伸べて、彼に代わつて石の上に乗る。では、射というものをお目にかけようかなと言つた。まだ動悸のおさまらぬ蒼ざめた顔をしてゐた紀昌は、すぐに気が付いて言つた。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手だったのである。弓？ と老人は笑う。弓矢の要る中はまだ射の射じや。不射の射には、烏漆の弓も肅慎の矢もいらぬ。(そして)、ちよつと彼等の真上、空の極めて高い所を一羽の鳶が悠々と輪を描いていた。その胡麻粒ほどに小さく見える姿をしばらく見上げている甘蠅が、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引き締つてひようつと放せば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。紀昌は慄然とした。今にして始めて芸道の深淵を覗き得た心地であつた。——そして、九年の間、紀昌はこの老名人の許に留まつた。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰にも判らぬ」とある。

\*

\*

例えば、スポーツの場合、現役時代というのは、誰でも相手とその「技」を直接競い合

って、その「優劣」を決するという、まさに「射之射」(或いは「太刀之太刀」)という時代に相当するかと思う。しかし、やがて「現役」を引退して、例えば、監督やコーチになつていく場合、「現役時代」とはまた違う、いろいろなことを学ばなければならぬ。――例えば、宮本武蔵は、「兵法」を「大工」にたとえて説いているのは有名であるが、その場合、現役時代というのは、いわば「優れた大工師」の時代であり、一方、「監督やコーチ」になるというのは、まさに大工の「統領」となることである。そして、その「統領」が心得るべきことは、まず、各人の腕の「上中下」を熟知して、各人をそれに見合った「適材適所」に配し、仕事が早くしかも手際よく進むようにすること。そして、何事も手抜きを許さないこと。各人の「体用(たいゆう)」「(心)技体」の体)を知ること。また、各人の「気」(「心)技体」の心)の「上中下」をよく見極めること。人々にやる気を起こさせること。そして、無理(限度)を知り、敢えて「無理」をさせないこと。これらが大工の「統領」の心得るべきこととした。そして、大工の「統領」になるためには、いわゆる「射之射」(或いは「太刀之太刀」)だけではなく、それに加えて、「不射之射」(或いは「不)太刀之太刀」)をも身に付ける必要があるということである。例えば、宮本武蔵の「兵法」も、武士たるものは、文武両面に優れているのは言うまでもなく、それらに加えて、様々な「諸芸・諸職」などにたずさわ(経験する)ることによって、それらの幅広い「知識や技術」などを身に付けることとの相乗作用によって、「太刀之太刀」だけではなく、それらに加えて、「不)太刀之太刀」をも身に付けるようになることが大事になるということである。

#### 四、下山

さて、「……九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付の変つたのに驚いた。以前の負けず嫌いな精悍な面魂はどこかに影をひそめ、なんの表情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆して叫んだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕のごとき、足下にも及ぶものでない。邯鄲の都は、天下第一の名人となつて戻つて来た紀昌を迎えて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返つた」とある。

ところが紀昌は一向にその要望に応えようとしない。いや、弓さえ絶えて手に執ろうとしない。山に入る時に携えて行つた「弓」もどこかへ棄てて来た様子である。そのわけを訊ねた一人に応えて、紀昌は懶げに言つた。「……至為は為す無く、至言は言を去り、至射は射ることなし」と。「……なるほどと、至極物分りのいい邯鄲の都人士はすぐに合点した。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇となつた。紀昌が弓に触れなければ触れないほど、彼の無敵の評判はいよいよ喧伝された」とある。

\*

\*

例えば、「詩人」にとつて、いわゆる「詩」を「書く必要」(或いは「書くこと」)がなくなれば、それは、その「詩人」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことであり、また、「小説家」にとつて、いわゆる「小説」を「書く必要」(或いは「書くこと」)がなくなれば、それは、その「小説家」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことである。同じように、「音楽(作曲)家」にとつ

て、いわゆる「音楽」を「書く必要」(或いは「書くこと」)がなくなれば、それは、その「音楽(作曲)家」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことであり、また、「画家」にとつて、いわゆる「描く必要」(或いは「描くこと」)がなくなれば、それは、その「画家」にとつての「最終地点」(或いは「極みの地点」)まで到達したことであり、その他、それらは、すべて同じことである。

つまり、詩人であれ、小説家であれ、音楽家であれ、また、画家であれ、陶芸家であれ、その他、どのような分野の誰であれ、未だいろいろと「作りたいもの、書きたいもの」などがあるうちは、その道の「途上」にあるのであり、その道の「極まるどころ」とは、すなわち、もう「……学ぶべき事も、書くべきことも、また、作るべきことも、その他、すべて尽きてしまう」ということである。——例えば、学問であれば、若い時からの凄まじいまでの「知識欲」が何十年と続いていたが、それが、突然、まさに「ばたつと止まってしまふ」、もう学ぶべき何もなくなつてしまふ」ということであり、また、宮本武蔵であれば、若い時からの凄まじいまでの「武芸の修行」を何十年と続けてきたが、それが、突然、まさに「ばたつと止まってしまふ」、もう学ぶべき何もなくなつてしまつた」ということである。それこそは、その人にとつての、まさに「最究極地点」(つまりは「極みの地点」)へと到達したということである。

## 五、晩年

さて 甘蠅師かんようしの許もとを辞してから四〇年の後のち、紀昌きしょうは静かに、誠に煙のごとく静かに世を去つた。その四十年の間、彼は絶えて射を口にすることが無かつた。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあるはずが無い。もちろん、寓話作家としてはここで老名人に掉尾ちようびの大活躍だいかつやくをさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外には何一つ伝わつてはいないのである。

その話というのは、彼の死ぬ一、二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌きしょうが知人の許に招かれて行つたところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶みおぼえのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途ようとも思い当らない。老人はその家の主人に尋ねた。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談じようたんを言つてゐるとのみ思つて、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌きしょうは真剣になつて再び尋ねる。それでも相手は曖昧あいまいな笑いを浮べて、客の心をはかりかねた様子である。三度紀昌きしょうが真面目な顔して同じ問いを繰返した時、始めて主人の顔に驚愕きょうがくの色が現れた。彼は客の目を凝平じつへいと見詰める。相手が冗談を言つてゐるのでもなく、気が狂つてゐるのでもなく、また自分が聞き違えをしてゐるのでもないことを確かめると、彼は、ほとんど恐怖きようふに近い狼狽ろうばいを示して、吃りながら叫んだ。「……ああ、夫子が、——古今無双ここんむそうの射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや? ああ、弓という名も、その使い途みちも!」

その後自分の間、邯鄲かんたんの都では、画家は絵筆を隠し、楽人は瑟しつの弦を断ち、工匠こうしやうは規矩きくを手にするのを恥じたということである。(これは、自分の「技量」《腕前》などを他人に自慢して得意がるようなことを心から恥じたということである。)

## 六、結び

例えば、われわれ人間というのは、一般的に、実に様々な「欲望」などを他人よりも少しでも多くむさぼることが「幸せ」なこととして、そのような「方向」に向かって多くの人たちが努力をしている傾向が強いかと思う。その結果、巨万の富を築き、豪邸に住み、ハーレムのような生活をし、また、社会的地位をも極め、そして、数知れぬ「榮譽」も授かることによつて、これでこの世の「人生を極め尽くした」と密かに自負することにもなるのだろう。それは、この世のありとあらゆる「欲望」を満たすという「極み」に達したということである。そして、そのような「価値観や人生観」などを持つ人たちから見れば、ソクラテスやシヤカ或いはイエス・キリストなどは、なんとも「かわいそうな人たち」という印象になるのかも知れない。しかし、たとえそのような恵まれた「環境」にあつたとしても、われわれ人間が生まれながらに宿している、いわゆる「四苦」（つまりは「生・病・老・死」の宿命から逃れることはでき得ないとともに、また、「人の心」も、自分の思い通りには少しもならないものである。それゆえ、その人の「悩みや苦しみ」などは、なおも永々として死ぬまで続くことになるのである。

一方、ソクラテスやシヤカ或いはイエス・キリスト、その他、そのような人たちというのは、いわゆる「欲望」を満たすという方向ではなく、むしろその「欲」から離れて、いわゆる「内的成長」（或いは「内的充実」）をめざすという方向であり、そして、真に「内的成長」（或いは「内的充実」）を遂げるならば、それは、一方の「極み」に達するということであり、例えば、「仏教」（その中の「小乗仏教」）においては、いわゆる「悟りを開くこと」（それは、おおぞら大空のような無色透明な「心」《無垢の心》）を取り戻すことであるが、それとともに、「心の自由」を得て、まさに「自ら考え、自ら判断し、自ら行動できるような、そういう精神の自立した一人の人間として新たに誕生する」ということでもある。また、「キリスト教」においては、いわゆる「回心」（それは「神と完全に一体となる」ということであり、また、「真言密教」であれば、それは、まさに「大日如来と完全に一体となること」であり、そして、プラトンであれば、いわゆる「善のイデア」を觀て取る地点こそは、まさに「その地点」であると言つてもよいのだろう。……

そして、うそ偽りなく、真に「内的成長」（或いは「内的充実」）を遂げている「魂」であれば、「……巨万の富も、華麗な豪邸も、ハーレムのような生活も、また、この上ない社会的地位も、そして、数知れぬ『榮譽』も、すべて色褪せたものに見えて来るといふこと」である。——例えば、自分は、何ひとつ手にしていない。自分は、何ひとつ持たず、ほとんど身ひとつでありながら、それでも「自分だけで足りている」ということである。それは、一体、なぜなのか？ それは、まさに「魂」そのものが、真に深く満たされているからである。そして、「魂」そのものが真に深く満たされると、もう「何もいらぬ」という「心的状態」になるのである。それが、まさに「涅槃の境地」であり、しかも、例えば、山ほどのごちそうを出されれば、それを心から楽しむことができ、また、セックスがしたいと思えば、セックスを楽しむこともできる。その他、この世のありとあらゆるものを樂しむことができるとともに、それらありとあらゆるものから開放されている（執着していない）ということでもある。それが、まさに生きながら「涅槃の境地」を樂しむ

ということであり、そして、これこそは、まさに人生の「極み」そのものである、と言え  
るものである。

\*

\*

「参考文献」

※底本 「山月記」 中島敦（「青空文庫」）  
※底本 「名人伝」 中島敦（「青空文庫」）